

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870132

研究課題名(和文) 近現代日本における古典文学の受容と関連文化財の評価の連動性

研究課題名(英文) The Relationship between the Reception of Classical Literature and the Evaluation of Cultural Properties Relating to the Classics in Modern and Contemporary Japan

研究代表者

永井 久美子(NAGAI, Kumiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：10647994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：絵巻など古典文学に題材をとる美術作品と、物語や和歌の写本・断簡について、文化財指定の歴史と美術市場における評価の変動を調査し、その価値の変化と、近現代における日本古典文学の受容の歴史との関連性を論じた。日本の文化財保護行政は、古社寺の什宝の調査と保存から、対外的に固有の文化を象徴する文物の選別と保護へと方向を転換していった。その中で、物語絵画や古写本の価値が高まったことと、国文学史の確立や外国語訳の出版を通して、古典文学、中でも平安朝の仮名文学が国風文化の精華とみなされるに至ったこととの具体的な連動性を論じた。美術史と文学の領域を横断する新たな研究の視座を開拓し、国内外で研究の成果を発表した。

研究成果の概要(英文)：It was after the literary works written by kana characters in the Heian period started to be regarded as the essence of the Japanese "original" culture that the values of the narrative painting scrolls, the ancient copies of imperial tales and the calligraphies of waka poetry rose in modern Japan.

The cultural properties protection administrations in Japan started from the investigations and preservation of the treasures of old shrines and temples to avoid domestic anti-Buddhist movement. Subsequently, Japanese government needed to prevent outflows of Japanese artworks. The establishment of academic frameworks of Japanese literature raised the values of literary works and accelerated the protection of literary works as cultural properties.

This is a new interdisciplinary examination, and this study blazed a trail both in the field of art history and literature. The papers about the research were read and published both within and outside Japan.

研究分野：比較文学

キーワード：近現代 日本古典文学 文化財保護 美術市場

1. 研究開始当初の背景

『古事記』『万葉集』『源氏物語』などが日本の「国民文学」として定着したのは、明治以降、わずか百数十年のことにすぎないといわれる。日本文学における古典、すなわちカノンの形成をめぐるのは、ハルオ シラネ、鈴木登美編『創造された古典 カノン形成・国民文学・日本文学』(新曜社、1999年)、品田悦一『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』(新曜社、2000年)、川勝麻里『明治から昭和における『源氏物語』の受容』(和泉書院、2008年)などの先行研究があり、1990年代後半以降、盛んに論じられてきた。

一方で、日本美術 という概念の形成をめくっても、佐藤道信『日本美術 誕生 近代日本の「ことば」と戦略』(講談社、1996年)、矢島新・山下裕二・辻惟雄『日本美術の発見者たち』(東京大学出版会、2003年)、吉田千鶴子『日本美術 の発見 岡倉天心がめざしたもの』(吉川弘文館、2011年)など、1990年代後半以降、研究が進められてきた。

ただし、両分野の研究は別個の分野で行われており、国文学史と日本美術史の確立の関連性は、これまで問われてこなかった。日本文学と日本美術は、ほぼ同時期にその概念が形成されたものであり、その並行する生成過程を、領域横断的に見る必要があった。美術コレクションの変動、古典文学に題材をとる近代美術作品の分析等から近現代の文化財の歴史を具体的に検証する、文学史と美術史の複合的な視点を有する新しい研究として申請を行った。

院政期の作品を中心に絵巻物の研究を行ってきた経緯と、それらの研究と並行して、1900年パリ万博の際に渡欧していた日本人たちが結成した「パンテオン会」の研究に携わり、万国博覧会についての研究に携わる機会を得た経験を、前近代と近代の双方に関わる本研究に活かすことができると見込んだ。

2. 研究の目的

日本の文化財保護行政の歴史は、廃仏毀釈の機運の中で危機に瀕した古社寺の什宝の調査と保存を出発点としている。その後、美術市場の拡大などの背景があり、美術品の海外流出を防ぐ方策へと方向を転換していった。仏教美術以外の作品も保護の対象として検討されるにあたり、その選定の価値基準として新たに設定された方針を明らかにする必要があると考えた。

本研究では、物語絵巻、和書、和歌断簡といった文学に関連する美術品の市場価値が高まり、それらが文化財保護の対象とされ始める時期、具体的には明治後期から昭和初期にかけての時期に注目した。同時期の文学研究の状況、古典文学の翻訳の出版状況などの関連性を調べることを通して、国宝・重要

文化財に文学に関連する美術品が指定されるに至る経緯と、仏教美術以外の美術品をめぐる価値判断の基準の確立を明らかにすることに、本研究の意義があった。

現在、有形文化財の指定対象は、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、古文書、考古資料と多岐に及んでいる。明治30年(1897)の古社寺保存法の制定をもって建造物が文化財として正式に認知されるに至るなど、文化財の範囲は、明治4年(1871)の太政官布告「古器旧物保存方」の発令以降、徐々に拡大してきた。

こうした文化財の概念の変化について、たとえば工芸品に茶器類が含まれるまでの経緯については、美術史における茶の湯の再発見の経緯があったことをめぐり、近年、研究が進められてきた(依田徹『近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ』(思文閣出版、2013年))。

本研究は、絵巻物と写本、書跡を主な分析の対象とした。また、仮名文学を日本人の国民性を特に反映するものと捉える思想の発展が文化財観に与えた影響を考察するにあたり、特に平安時代の文学ならびに美術作品に着目した。

この研究は、国文学史の確立の歴史と、書跡・典籍、物語絵画類の評価の変動を具体的に追い、「国風文化」の概念が美術市場および文化財保護行政に及ぼした影響を明らかにすることを目的としたものである。

3. 研究の方法

日本古典文学の中から、王朝物語の代表格とされた『源氏物語』、和歌集のうち、近代において国民歌集として注目された『万葉集』、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』、そして日本神話のテキストたる『古事記』『日本書紀』に具体的に焦点を絞り、それらの関連文化財について研究を行うものとした。

美術品の流動と保護の歴史を追うにあたり、大名家や寺社の売立目録のほか、国宝、重要文化財、重要美術品の認定目録の調査を行った。また、海外の美術コレクションの成立の過程と特色を明らかにするため、研究期間中、具体的には、大英博物館およびケルン東洋美術館、ベルリン国立アジア美術館(ダーレム美術館)とを訪れ、調査を行う機会を得た。

研究に際し、絵巻ならびに文学作品の内容そのものの分析も行い、新たに発見した点については知見を適宜まとめるものとした。国宝「源氏物語絵巻」をはじめとする絵画の構図の再検討や、近現代における絵巻の受容のあり方の問題についても取り組むものとした。

平成25年度から29年度にかけては、今橋映子氏を研究代表者とする基盤研究(B)「雑誌研究の理論と方法に関する比較文学・比較芸術的研究 明治大正期日本を中心に」にも

研究分担者として携わり、美術評論家・岩村透(1870~1917)の書簡など、明治大正期の美術批評についての新資料の紹介と研究にも従事した。その研究とも関連づける形で、美術批評および文学評論など、近現代の日本の「文化財観」の確立にまつわる言説の分析を行うものとした。

4. 研究成果

記紀神話、『源氏物語』、そして『万葉集』『古今集』の順に、3年間にわたる研究を遂行した。

記紀神話をめぐっては、日本神話が海外に知られる契機となったバジル・ホール・チェンパレン(1850~1935)、ウィリアム・ジョージ・アストン(1841~1911)による英語訳『古事記』(チェンパレン、1882年)、『日本書紀』(アストン、1896年)の刊行が国内外に及ぼした影響を主に調査した。特に、チェンパレンらが関与し、明治期に対外的な土産品として人気を博した外国語訳絵本「ちりめん本」の一連の刊行により、英語訳を出発点として記紀神話の再話が行われた、その内容が逆輸入され、日本において記紀神話が人口に膾炙する起因の一つとなった様子を明らかにした。

また、東西の神話の比較研究が進展したこととドイツ文献学の導入に伴い、西洋の神話に匹敵するテキストとして記紀神話が注目されたこと、歴史資料および文学作品の写本の学問上の評価ならびに市場価値が国内で高まってゆく経緯を追った。

日本の近代画壇が、西欧の神話画に相当する絵画を生み出そうとした一連の潮流については、これまでの美術史研究でも明らかにされてきた。画壇の動向と並行して、宝生院本『古事記』、前田育徳会本『日本書紀』などの古写本が国宝に指定される経緯を見ることを通して、皇室を中心とする国家形成の流れの中で、文学テキストと美術品の双方が有した政治的な意味についての考察を深めることができたと考える。

『源氏物語』をめぐっては、関連する美術品のうちもっとも早くに国宝指定がなされたのが俵屋宗達筆「源氏物語関屋濤標図屏風」であったことについて、国際的な美術市場における琳派の評価と、『源氏物語』の、世界に発信される日本古典文学としての価値の確定との結びつきを論じた。また、「源氏物語絵巻」の国宝指定までの流れをめぐって、「国風文化」の概念が定着し、美術史において大和絵への評価が高まるまでの経緯と、国文学史における『源氏物語』のカノンとしての定着の歴史との関連性についても論じた。

『源氏物語』は、近代の西洋文学において小説の評価が詩や戯曲と並ぶまでに高まった機運をうけて、西洋の小説に匹敵するものとして高く評価され、源氏絵や古写本の国宝

指定が昭和初期までに進められた。しかしその一方で、物語の内容については猥雑、不敬として批判がなされ、『源氏物語』の内容を詳しく紹介することについては、強い反論があった。昭和初期までの「源氏物語関屋濤標図屏風」や「源氏物語絵巻」の図版解説では、批判を惹起するような物語内容への詳しい言及は回避されている。高い評価と内容への批判という矛盾の中で、『源氏物語』に関連する絵画や書籍が美術市場や文化財保護行政の中で価値を見出されてゆく様子を明らかにした。

そして『万葉集』『古今集』をめぐっては、主に古筆切の美術市場における評価の高まりと、それらの海外流出を防ぐための法整備の流れを追い、書が美術品として扱われるようになるまでの経緯を論じた。近代において「やまとうた」が日本人の国民性の発露として新たに「発見」されること、「国風文化」の概念の確立を通して、特に仮名の書が日本独自の文化の精華と認識されるに至ることについて、『万葉集』『古今集』の古写本および断簡の文化財指定の歴史を追うことを通して具体的な考察を行った。

文化財の海外流出を防ぐべく昭和8年(1933)に急遽制定された「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」のもと、重要美術品として指定された文化財の中に勅撰集の古筆切が多数含まれること、宸翰をはじめとする皇族ゆかりの古筆が特に多いことから、昭和初期の皇室を中心とする文化財の価値評価の様子についても考察した。

『古事記』『日本書紀』『源氏物語』『万葉集』『古今集』の研究を進めてゆく中で、日記文学および説話文学についても調査を行う必要性が新たに浮上してきた。『紫式部日記』および「紫式部日記絵詞」と、「病草紙」と説話集の近現代における受容のあり方については、平成27年度から28年度にかけて具体的に調査・研究を行った。前者についてはは鹿島美術財団からの研究助成を、後者については共同研究の出版助成を出光文化福祉財団から受ける機会を得て、それぞれの研究内容を連動できたことで、調査と研究の幅を広げ、考察をより深めることができた。

一連の研究成果は、アジア未来会議、国際美術研究集会エコール・ド・プランタン、国際比較文学会等での発表を通して国際的に発信した。また、『紫式部日記』の研究について助成を得た鹿島美術財団では、優秀者表彰を受けるに至った(永井久美子「紫式部の近代表象——古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」平成29年5月12日受賞)。研究内容を評価される機会を得て、韓国外国語大学校での招聘講演も予定している(永井久美子「『紫式部日記』の近代」平成29年6月3日)。

本研究を通して、近代における古典文学の受容をめぐり、新たな研究課題を見出す成果もあった。近現代において、紫式部や清少納

言といった前近代の文学者たちがどのような「文豪」として捉えられたのか、その文学者像を、西欧の文豪イメージからの影響も視野に入れつつ分析する新たな課題について、新たに助成を得て、すでに取り組み始めている(基盤研究(C)「前近代文学者たちの近代明治・大正・昭和期における伝記と肖像の継承と変容」研究代表者・永井久美子)。前近代と近代、文学と美術を結ぶ研究を、今後も発展させてゆきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

永井久美子「紫式部の近代表象——古典文学の受容と作者像の流布に関する一考察」(平成 27 年度鹿島美術財団「美術に関する調査研究の助成」研究報告)『鹿島美術財団年報』第 33 号別冊、鹿島美術財団、平成 28 年 11 月 15 日、p.219 ~ p.223

永井久美子「『平家物語』「小宰相身投」を読む——小宰相と通盛、その出会いの物語と『源氏物語』」『比較文学研究』第 101 号、東大比較文学會、査読有、平成 28 年 6 月 10 日、p.30 ~ p.43

永井久美子「国宝「源氏物語絵巻」における画面分割の方法—源氏と女三の宮の描写にみる特徴」『人文・自然研究』第 9 号、一橋大学大学教育研究開発センター、平成 27 年 3 月 31 日、p.194 ~ p.211、p.8 (英文要旨)

NAGAI, Kumiko “Partitions in *The Tale of Genji Scroll*” 12e École Internationale de Printemps (The 12th International Spring Academy) “Wakugumi (Cadres conceptuels / Frameworks) en Histoire de l’Art: Regards croisés sur l’Occident, le Japon et l’Asie”, Rapport / Report 東京大学、平成 26 年 12 月 17 日、p.32 ~ p.33 日本語、英語、仏語併記(タイトル掲出は英語のみ、仏語訳は Ivan Grandelement 氏による)

永井久美子「19 世紀日本における伝統の創造——ちりめん本の編纂に見る多様性と調和」第 2 回アジア未来会議論文集(PDF 形式学会配布) 査読有、平成 26 年 8 月 21 日、p.1 ~ p.10

〔学会発表〕(計 7 件)

NAGAI, Kumiko “Between Calligraphy and Literature: Japanese *Waka* Poetry as National Treasures” International

Comparative Literature Association (ICLA) Congress Wien 2016 於・University of Vienna (オーストリア共和国ウィーン) 平成 28 年 7 月 22 日

永井久美子「夫の菩提を弔うということ——『平家物語』小宰相を中心に」国際日本文化研究センター共同研究「戦争と鎮魂」平成 27 年度第 1 回研究会 於・国際日本文化研究センター(京都市) 平成 27 年 8 月 8 日

永井久美子「「源氏物語絵巻」の国宝指定をめぐる」第 15 回「ハノイ・ロンド」(ベトナム国家大学ハノイ校附属人文社会科学大学日本学学科定例研究会) 於・ベトナム国家大学ハノイ校(ベトナム社会主義共和国ハノイ) 平成 27 年 3 月 21 日

永井久美子「文学史と美術史の交差——昭和初期の文化財保護行政と『源氏物語』」日本比較文学会東京支部例会 於・東京大学(東京都目黒区) 平成 26 年 11 月 15 日

永井久美子「19 世紀日本における伝統の創造——ちりめん本の編纂に見る多様性と調和」“Creation of Traditional Culture in the 19th Century Japan: Diversity and Harmony in the Compilation of Picture Books” 第 2 回アジア未来会議 於・ウダヤナ大学(インドネシア共和国バリ) 平成 26 年 8 月 23 日

永井久美子 “Partitions in *The Tale of Genji Scroll*”(「吹抜屋台の構図における場面分割——国宝「源氏物語絵巻」の場合」) 12e École Internationale de Printemps (The 12th International Spring Academy) 於・東京国立博物館(東京都台東区) 平成 26 年 6 月 10 日 英日併用発表

〔図書〕(計 1 件)

永井久美子「後白河天皇擁立の物語としての「道鏡法師絵詞」」佐野みどりほか編『中世絵画のマトリックス』青簡舎、平成 30 年 2 月刊行予定、印刷中

〔産業財産権〕

- 出願状況(計 0 件)
- 取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

河野元昭監修『別冊太陽 日本美術史入門』(平凡社、平成 26 年 12 月 5 日)コラム、カテゴリー解説、図版解説執筆(担当項目はそれぞれ下記の通り)

- ・永井久美子 COLUMN 日本美術のエポック「唐から宋へ—中国美術の移入と影響」 p.86 ~ p.87
- ・永井久美子 カテゴリー解説「神像の誕生」 p.88 ~ p.89
- ・永井久美子 カテゴリー解説「浄土への祈り」 p.90 ~ p.91
- ・永井久美子 ギャラリー「浄土への祈り 平等院鳳凰堂・庭園」 p.92
柳澤恵理子氏執筆とのクレジット誤記
- ・永井久美子 ギャラリー「阿弥陀聖衆来迎図」 p.95
柳澤恵理子氏執筆とのクレジット誤記
- ・永井久美子 ギャラリー「平安仏画の多彩な装飾技法」 p.96
- ・永井久美子 ギャラリー「平家納経」 p.98
- ・永井久美子 COLUMN 日本美術のドラマ「末法の世に釈迦を描く」 p.100 ~ p.101

6 . 研究組織

(1)研究代表者

永井 久美子 (NAGAI, Kumiko)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10647994

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：